

内科医 つれづれ草

高山浩一

⑭

私は大病院の外来で主に肺がんの患者さんを診ています。患者さんはさまざまに悩みを抱えています。多いのは病気による症状や抗がん剤の副作用に関する悩みですが、なかなか対応が難しい悩みの一つにがんの再発への不安があります。肺がんの場合、早期であれば呼吸器外科の先生に手術していただきます。ただ、手術で肺がんを全部摘出できたといつこと

がん再発の不安

と、肺がんが根治したということとはイコールではありません。完全に切除できたと思われる方でも、残念ながら一部で再発がみられるからです。そこで術後は慎重に経過を見て、5年たったところで再発がみられなければ、ようやく根治できたとなります。肺がんだけでなく、がんの術後の患者さんは大なり小なりそのような不安を抱えながら日々を過ごしているものと思えます。私がこれまでに診てきた肺がん術後の患者さんの中に、再発の不安をいつも口にされる方がいました。その患者さんに「手

患者同士で勇気づけ

術ができたのだからよしとしましよ」などと言っても気休めにしかなりません。進行した肺がんの患者さんをたくさん診て



イラスト・山本重也

きたわれわれからすると、早期発見の患者さんは恵まれた状況のようにみえますが、それはあくまでも医療者の視点です。早期でも進行期でも患者さんにとって自分ががんになったという一事においては同じことです。しかし、われわれは患者さんの悩みは理解できたとしても、同じ立場で悩むことは難しいと言わざるを得ません。がんのことをよく知っているが故に、がん患者さんと同じ位置に立てない構造的ハードルがそこには存在します。患者さんには「今のところ再発の兆候はありませんし、5年を目標に頑張ってくださいね」と励ましてお帰りいただくのですが、不安感を完全に払拭できていないことを次回

の外来で気付かされます。患者さんと同じ位置から患者さんの気持ちを慮めることができれば、医療の素人ではあっても、家族や気心の知れた友人であり、また同じ病気の患者さんたちでしょう。最近、がん患者会もたくさんつくられていますし、病院でも「がんサロン」という患者さんの交流会が開かれています。がんの患者さん同士がそれぞれの経験を語り、自身の言葉で励まし合うことで、お互いに勇気づけられることでしょう。同じ病気の患者さんの言葉は、時として医療者の言葉よりも重いことをわれわれは知っておかねばなりません。(京都府立医科大学教授)